

司令の休暇

阿部 昭

司令しらいの休暇きゅうか

昭和四十六年四月二十日 印刷
昭和四十六年四月二十五日 発行

定価 五五〇円

著者 阿部あべ 昭あきら

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(〇三)二六二二番(六代)

振替 東京 八〇八番

印刷所 塚田印刷株式会社

製本所 共同製本株式会社

〔乱丁、落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替えいたします〕

目次

司令の休暇

5

明治四十二年夏

191

後記

211

装帧
下田
義寬

司令の休暇

司令の休暇

第一章

その夏もいつもの年と変りはなかった。たったひとつ、おやじが死のうとしていることをのぞいては。

息子は相変らず帰ってくるのが遅かったし、眠っている時のほかは家にいることがほとんどないのもこれまで通りだった。勤めの都合で早く帰れないのは仕方がないとしても、飲み歩いて夜中になるのは長い間の悪い習慣だった。だが、僕がこんなふうに思っていたのは本当だ。とにかく自分だけでもふだんと同じようにしてはいくてはいけない。出来るだけこれまでと変りなく振舞ってはいくてはいけない。

澄んだ空に星が光っている夜など、海鳴りがとても近くに聞えることがあった。反対に、雨がしとしと降るような日には、濡れた砂や樹の匂いがあたりに濃く立ちこめて、真夏も近いことを思わせた。そんな真夜中に家の前に停まる車があれば、それはもう僕にきまっていた。そして、僕が降りる気配をおやじがじっと聞いていると思うだけで、立ちすくむような気持になる。連日のようなこの夜中帰りは、何と言いつても親不孝なしわざにはちがいがなかった。

それから、靴音をしのばせて石段をのぼり、玄関のプザーを押す。妻が二人の子供と雑魚寝しているベッドから滑りおりて、まず部屋の大きな明りをつけ、つぎに玄関の明りをつけてそっと出てくる。そのあいだ、僕は隣り合ったおやじの家のほうに耳を澄ましている。ドアのガラスごしに外をうかがいながら早口に僕の名を呼んで確かめる妻の不機嫌な声が、これもなぜかこのごろは妙に不吉な感じで僕の気を滅入らせる。あきらかにそれは、僕らが息をころし周囲の物音に耳を澄ますようにして暮しはじめたからだ。

こうしていま僕が立っているすぐうしろが「向うの家」の座敷だった。その雨戸一枚へだてたすぐ向うにおやじが寝ている。そして、僕が帰ってくる今時分は、きまって眠られぬ眼をあいて闇の中でじっと息子の足音に聞き耳を立てているらしい。のみならず、もうじき死んで行くこの老人が、息子の将来のことで余計な頭を使っているらしいということも伝わってきていた。おやじは僕に面と向って言うことはせずに、嫁をつかまえて、「悌介のやつももう少し会社で要領よくやれんものか……」などと言っているらしい。息子が勤め先で面白くなく、出世どころかしょっちゅう左遷されたり、それに反撥して自堕落な勤め方をしているのを、父親のふしぎな直感から見抜いているようだった。

おやじの勘はみごとに的中していたが、そのことはまた僕を笑わせもした。なぜとって、「もう少し要領よく」やれなかったばかりに万年大佐の境涯に沈淪して終ったのはほかならぬ

おやじのほうだったし、息子は息子で、このごろようやく父親のヘマな一生ということを考えはじめていたからである。それにまた、おやじが僕の何をどう見抜いていようと、自分が癌で死んで行くことだけは知らないでいるのだから……。おやじと僕とのこんなユーモラスな食い違いというのも初めてだった。

それはすなわち、身内の僕らにしてみれば、栄利栄達とはおよそ縁のなかった轆轤不遇の一海軍軍人の死、部下の目からすれば、大佐どまりのうだつのあがらぬ老司令の御最期だ。そうして息子は、なんとかこのままおやじを騙しおおせて死なせたいものだと考えている。あんなに癌をこわがっていたのだから、こいつだけはどうあってもウヤムヤにしてしまわねばならぬ、と心に決めている。おやじにとりついたのが癌だということ、おまけにその化け物がもう手のつけようもないほど大きくなっていると知らされたとき、僕がまず眼に浮べたのはおやじの死にざまのことだった。いくら死を日々の友としてきた職業軍人だからといって、彼が昼の上で上手に死ぬるとはかぎらない。……僕がおそれたのは、おやじがひたすら希望と恐怖にすりへらされて、あさましく衰弱したあげくに絶望して死んで行くことだった。しかし、それならば人間にはそれ以外のどんな死に方があるというのだろう。自分の父親がどんなふうに死んで行ってくれば満足だというのだろう。僕はいまや自分がおやじに關しては一切を許そうという気持ちになっているのを感じていた。と同時に、息子がおやじを許そうなどと考えるよう

になってはおしまいだ、とも思っていたのである。

たしかに、おやじのことを考えるとやりきれなかったが、それをまぎらそうとして飲み歩いていたわけではなかった。酒でまぎれるようなことがこの世の中にそうそうあるわけもないのは、酒でしくじったおやじの一生を見てもよく分ることだった。ただ僕は、おやじが死ぬと判ったからといって、いままら自分の生活を改めようとして何になる、と思っていたまでのことだ。そして、実際問題としてもう打つ手が一つもないのをいいことに、すべてを時間とともに流してしまおうとしていたのである。深夜、東京から鶴沼^{つるぬま}へ帰る乗り物の中で、僕はいくどとなく考えたものだ。——あと何カ月、何十日、いっしょにいられるかわからぬという時、自分のようにこうして毎日をのうのうと送り暮している息子がいるものだろうか。親孝行な息子ならばこんなことをしてはいまい。もはや何も打つ手がないとしても、せめて毎日早く帰って父親のそばにいてやろうという気持になるだろうに。……そんなとき、息子の自分に欠けているのは、肉親のやさしさではなくて、ある種の勇氣であるように思われた。

いづれにしろ、おやじは何も知らなかった。少なくとも僕らの目にはそう見えた。ひょっとしたら、おやじは、僕らが欺きおおせるとタカをくくっていい気になっているのを、自分もダメされるふりをしてせいぜい協力していたのかもしれないに。そうしておもてむきは、ありふれた長患いの病人をかかえた家庭のように、やはり僕らの生活全体にはほとんど目立った変

化はなかった。

「なんとまあ、間のわるい……」

おふくろは、僕や妻と顔を合わせるたびにこぼしたものだ。それは、おやじの不運を嘆くというより、夏のいちばん暑いさかりに葬式を出さなくてはならぬ公算がすこぶる大だったからである。

「よりによってまた、暑い時分に死になさる……」

そんなひとりごとを言いながら、おふくろの頭の中にはもう葬式のことしかないようだった。葬式に着るもの、締めるもの、履くもの。それはまだいいとして、この機会に雨戸を新しくしたい、畳表も張り替えたい、ついでに襖も、……と言い出して息子夫婦をおどろかせた。こんな隙間だらけのあばら屋で夫を死なせないというおふくろの気持はよくわかる。おやじのクラスの他の未亡人たちの手前もあるからだ。かりそめにも海軍軍人の未亡人として、どこから見ても一応恥ずかしくない程度に夫の葬式を出したいという、年来の妄執に似た虚栄心可言わせることなのである。それはこんな場合でなかったら、おやじもあながち歓迎しないところではなかったろう。元氣な時分、おやじはよく冗談に「こんな家からおれの棺桶が出るのはかなわん」などと言っては、老妻を憂鬱な気分におとし入れて面白がっていたものだ。だが、婆の一切に執着をなくしてしまったおやじにひきかえ、おふくろはいまでも以前住んでいた海

辺の屋敷を人手に渡したことを忘れかねていた。それは二人がむしろ人生の晩年に近くなつてから、やっと持つことのできたお氣に入りの家や庭だった。そして、戦後の売り食いの末に、それも手放さなければならなくなったとき、おふくろにはもう再びその程度の家に住む希望も失われたのである。

世帯は別だが、僕ら夫婦の住まいは、おやじのそのボロ家と棟つづきにつなげたものだった。近所で借家住まいをしていた僕らに、そうしろとすすめたのは当のおやじだった。ところが、たとえ安普請でも僕らが新築した白いモルタルと並ぶと、おやじのねぐらはいよいよ薄ぎたなく腐つたように見え、南をふさがれたので日もうくに射さなくなっていた。それがいままた、息子夫婦が窓をふさいでしまった陰気な部屋でおやじが死ぬとあつてはなおさら気がひける。しかしまた、永年の貧乏暮しで傷み切つた家の中が、ある日突然、見違えるようにきれいになつたとしたら、おやじは何事かと眼を見はるにちがいない。それはとりもなおさず、「おとうさん、あなたはもうじき死ぬですよ。……」と言つて聞かせるようなものではないか。

そんなふうに何カ月か先の葬式の段どりにいまから熱中しているおふくろを見てみると、僕は何も知らぬおやじの心中を察して、よけいせつない氣持になつてくる。このおふくろという女と結ばれたおやじの運不運ということ、またおやじという男とめぐり合つたおふくろの不幸ということを考えずにはいられなくなる。とにかく、夫が癌だと知らされると、おふくろの